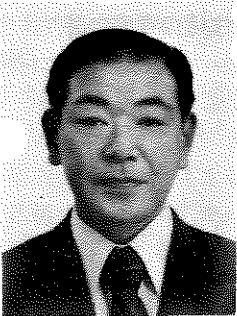


栃木県中学校長会 会報

着 眼 点



栃木県中学校長会 長
宇都宮市立一条中学校長
寺内 秀 男

わが子を嫁にやったり、
わが子に嫁を貰ったりする
場合、相手の家庭について
見たり聞いたりして調査を
する。しかし相手の家庭に
ついて詳細に知ることは困
難である。このような場合
眼の着けどころ いわゆる

着眼点というものがある。それは玄
関の汚い家、また座敷や応接間がきれいな
便所の汚い家からは嫁に貰うな、嫁にやるな
というものである。

ところである学校の教育が立派に行われているかどう
かということを外から判断することは極めて困難なこ
とであるが、この場合を着眼点というものがある。 昭
和20年代の着眼点は、その学校に行き、校舎の内外
が整然ときれいな学校は、立派な教育が行われ
ていると見て間違い無いというものであった。当時は
終戦直後の混乱期で、世の中がすべて雑然としていた時
代であった。このような時代に、校舎の内外をゴミー
ンくきれいにしておくような心ばえを持った教師と生徒
のいる学校は、他を見なくても立派な教育が行われて
いると見て間違い無いというものであった。 昭和30年
代の着眼点は、始業のベルと同時に毎時授業が開始され
ているかどうかというものであった。この年代は、勤務
評定反対闘争、学力テスト反対闘争等が行われ、教職員
の服務秩序が乱れ勝ちの時代であった。職員室へ行って
みて、始業のベルが鳴ったのに、教師がお茶を飲んだり、
煙草を吸ったり、雑談をしており、しばらくたつて教室
へ行くというような学校は、いかに立派な教育目標など
を掲げておいても駄目で、授業のベルと同時に授業が開
始されるような学校は秩序ある学校運営がなされており、
他を見なくても立派な教育が行われていると見て間違い
無いというものであった。 昭和40年代の着眼点は、
校内の研究体制が整備され、教師一人ひとりが熱心に研
究活動に取り組んでいるかどうかということであり、そ

して昭和50年代一すなわち現代の着眼点は、その学
校のPTAの会合に会員が多数出席するかどうか、PT
Aの活動が活発に行われているかどうかということであ
ると言われる。これは一見突飛をここのように思われる
が、次のような理由から当を得ているように思われるの
である。 御承知のように、国の中央教育審議会、社会
教育審議会が、昭和46年に、わが国の教育の改革につ
いて文部大臣に答申をしたが、その中で従来わが国にお
いては、教育というと学校教育を考え、これに過度に期
待し、過度に依存するという傾向があった。しかし学校
教育には自ずから限界がある。家庭教育、社会教育を充
実させ、それぞれの教育が十分に役割を果たすと共に、有
機的な連携を図っていく必要があると述べている。事実
子供は学校でのみ生活するのではなく、家庭で生活し、
地域社会で生活しているものであり、この三つの生活の場
が教育的に整えられてこそはじめて有効な教育が成り立
つものであろう。ところでPTAはこの三つの教育、す
なわち家庭教育、学校教育、社会教育のいずれにも関係
する団体である。すなわち子を持つ親として家庭教育の
責任者であり、学校教育を理解し、これに協力する団体
であり、また社会教育法に定める社会教育活動を行う団
体である。その果たすべき役割は今日の教育において重
要な意義を持つものと言えよう。

今日中学生の非行の増加ということが問題になって
いる。われわれは学校教育運営のすべてをあげて対応し
ていかなければならないが、一方中央教育審議会、社会
教育審議会が指摘する如く、学校教育は万能ではなく限界
があるという事実認識に立つて、幅広い対応を考えてい
かなければならないと思うのである。PTAの会合に父
母会員が多数出席し、教師会員と共に教育を考え、子供
のための有効な教育活動をそれぞれの役割に従って実践
していく、いわば「生みの親、育ての親」である父母と
「教えの親」である教師が、手を組み、肩を組んで、一
体となって子供の教育の為に責任を果たしていく、その
ような体制を確立することが今日特に必要であると思
えるものである。そのような意味で、PTAの会合に会員
が多数出席するかどうか、PTAが活発な活動をして
いるかどうかということは、その学校が今日の教育的課題
に対応する体制になっているかどうかを知る一つの着
眼点となるのではないかと思うのである。

PTAは教師にとって他の組織、他の団体では無い。
それは文字通り「父母と教師の組織する団体」であり、
教師は会員としてその発展と充実について努力すべき責
任を有する。
われわれは教育の専門家という立場から積極的にその責
任を果たすべきであり、そのことは取りも直さず学校教
育そして更には広い意味の教育の充実発展に継がるもの
であり、わが国の今日における教育的要請に応えるもの
であろう。

専門部の活動計画決まる

調査部

部長 赤石澤 一 明 (泉が丘中)
 副部長 和田 実 (古里中)
 " 榎木 定治 (城山中)

A 主な事業計画

- 1 全日中調査部との共同調査である「中学校教育に関する調査」の実施
- 2 県中学校長会ならびに各専門部会活動に必要な調査と資料提供
- 3 他県中学校長会・教育団体との連けいと資料の交換
- 4 調査結果や収集資料の配布

B 中学校教育に関する調査

去る6月、各校悉皆による調査の積み上げと、県教委を始め関係機関からの資料収集の両面作業で、広範多項目にわたる調査票の記入を完了した。

県教委各課並びに県統計課、各校並びに各地区調査部員の御協力に感謝申し上げたい。

以上、この調査の初回(昭48)と本年度との比較を行い参考に供したい。

比較項目	昭48.4.1	昭56.4.1
給料		
初任給(大学卒)	51,900円	113,900円
勤続10年	78,400	183,600
勤続15年	94,800	227,400
勤続20年	111,800	266,500
勤続32年(校長)	139,500	346,200
勤続36年(校長)	146,400	355,800
旅費(1人当年間)	24,100円	66,300円
校長退職年齢(勤奨)	58才	60才
生徒数	78,836人	79,175人
教員数(校長教頭教諭養護教諭等)	3,588人	3,865人
高校進学卒	897%	938%

分科会	司会者	提案者	記録者	指導助言者	会場
① 新教育課程	茂木中 藤間欣二郎先生	鹿沼北中 宮澤正夫先生	南河内中 大房信一先生	県教委義務教育課 指導主事 佐山政雄先生 校長会副会長 巻島武男先生	4階 視聴覚室
② 生徒指導	東陽中 平野 勇先生	足利一中 蓮沼恒八先生	田沼東中 池澤平八郎先生	県教委義務教育課 指導主事 磯 英世先生 校長会副会長 大和田 豊先生 阿部 美夫先生	4階 図書室
③ 学校経営	七合中 宮崎一郎先生	氏家中 大澤龍雄先生	須賀川中 花塚忠夫先生	県教委義務教育課 課長補佐 黒須健児先生 校長会副会長 角海忠一先生	北校舎1階 PTA室
	南 那 須	塩 谷	北 那 須		

研修部

第3回栃木県中学校長会研究大会を

9月10日に開催

部長 高柳 久 (宝木中)
 副部長 宮沢 正夫 (鹿沼北中)
 " 新井 角治 (赤見中)

新教育課程実施の第1年目を迎え、中学校長として、特に「人間性豊かな生徒の育成を目指す中学校の教育」を研究主題として、学校運営上の諸問題を究明する第3回、中学校長会研究大会を下記により開催することになりましたのでお知らせいたします。

- 1 期日 昭和56年9月10日
午前9時30分より
- 2 場所 宇都宮市立一条中学校
- 3 研究主題および分科会
主題 人間性豊かな生徒の育成を目指す
中学校教育の充実
第1分科会 新教育課程実施上の諸問題
第2分科会 生徒指導上の問題点
第3分科会 学校経営上の諸問題
- 4 講演 演題 内外情勢と日本民族の将来
講師 千葉大学教授 清水馨八郎先生
- 5 その他 当日の分科会を分担する先生方は次のとおりです。

分科会の指導助言者、司会者、提案者および記録者と会場

編集部

部長 吉高神 猛二郎 (田原中)
 副部長 藤 間 欣二郎 (茂木中)
 " 高 島 守 親 (横川中)

- ・事業計画 7月 編集部会
- 8月 会報第2号発行
- 11月 編集部会
- 12月 会報第3号発行

計画に従って部会を開き、主な業務の本会報編集について話し合った。

本年度第一号は総会資料に含まれることになっているので第二号に会長・各専門部長・編集部の半数の部員の意見を載せようということで原稿を依頼することにした。第三号には部員の活躍により各地区だより、随想・座談会など織りまぜる企画である。

内容については、研究報告・諸問題の提起・外部からの提言・随想・地区だより・会員の声と多様にとり入れ、格調の高さも要求されるであろうが硬軟両面にわたるものとし、これからも会員に親しまれる「会員の会報」に方向づけられた。

編集の参考のために全日中校長会編「中学校」を開くと、周知のように60ページの冊子に毎号特定の主題を設け、巻頭に正副会長のどちらかが主張をのべ、次に号の主題に沿って研究所・大学など外からの評論が掲載されている。その次に二三中学校長の同論旨が展開され、軟らかく、郷土随想、教育トピック、校長会だよりと続く。

この「だより」には各地の会報で紹介され、本県会報にもふれている。多くの会報は4~8ページ建てである。内容は巻頭言・主張(特別寄稿もある)各大会参加報告・詩歌・随想・会員の声・事務局裏話・なかには勇退校長の「一言集」を特集するものなど、いずれにしても多彩である。

本会編集部員のなかには出版物の編集に豊かな経験を持つ諸氏がいる。高島氏は「下野教育」の編集に永らくたずさわっていた。現に沢村氏は全日中校長会副編集部長として「中学校」編集におほおおりである。全国各地校長会の動向の察知が期待される。会員各位のご協力を願う。

職業指導部

部長 相田 四子 (陽東中)
 副部長 柳田 明 (姿川中)
 " 保倉 照政 (佐野城東中)

最近行制改革をめぐり、人事院勧告の実施についての諸問題などを始め、国家公務員定年制に伴う地方公務員の定年制や、退職金の減額などについて色々の問題点をかき立てております。我々現場にあって、日常の業務に追われて研究することが不足勝ちになり、情報不足の現状です。昨年は、退職時をめぐっての退職金や、これに要す関係書類並に退職後の医療制度などについて研究会を持ったわけですが、内容がむずかしく、簡単に理解することができない問題が残されていました。更に現今の変化を併せ考えると、もう一度同じような問題にとりくみ、更に一歩進めて見たいという意見が多かったので、下記のような計画で研究会を持つ予定になっています。

記

1. 日時 11月16日(月)
2. 場所 河内庁舎5階会議室
3. 内容 退職時における諸問題について
その他



「戒語」より

- ・ ひとのかおをみつめてものいふ
- ・ かへらぬことをいくたびもいふ
- ・ おのがいちをいひとおす
- ・ ひとのいやがるもしらざるがばなし
- ・ てがらばなしにこのじまん

☒ 進路対策部

部長 稲葉 乙彦(小山三中)
副部長 福田 良一(箒根中)
〃 島 方 幸 男(雀宮中)

1 進路対策部会の活動計画について

進路対策部会は、中学校における進路指導に関する諸問題の把握並びにその対策について研究し、所要の施策を講ずることをねらいとして、56年度は次のとおり活動することとした。

○ 第1回進路対策部会

7月14日 一条中学校で研究協議

研究協議題

「中学校の進路指導と高校入試の諸問題」

○ 第2回進路対策部会

12月初旬 宇都宮市で研究協議

研究協議題

「職業高校における一日体験学習の諸問題」

2 第1回進路対策部会の概要について

当日の研究協議は、進路対策部会員(14名)と県中学校長会長並びに県教委の黒須義務教育課長補佐、江連高校教育課長補佐及び杉田指導主事の出席を得て行われた。

(1) 県立高校入試及び合格者発表期日について

県立高校入試が、中学校の卒業式間近になって行われ、その合格者発表期日の前日に中学校の卒業式を行うことが慣例となっている現状を検討し、生徒指導や進路指導上から改善すべき点はないかどうかという趣旨で協議した。このことについて、部会員は予め各地区で校長各位の意見を聴きおいたので、種々の議論が出されたが、結論としては本県で今まで実施してきた方向でよいのではないかとということになった。

(2) 県立高校における推薦入学の枠の拡大について

職業高校の推薦入学は農業に関する学科及び水産に関する学科の全部で行われ、商業・工業・家庭及び厚生(衛生)に関する学科でも58年度から実施される予定という。そこで、次の二点について協議した。

ア 推薦入学の枠を15%よりもっと引き上げ

てはどうかということについては、学科試験を受けて入試にいどむ者を考えれば、現状の15%程度が適当ではないか。

イ 推薦入学を普通科にまで拡大することは法的にも無理であるようであるし、県教委も考えていないようである。また、中学校側としても実施すべきでないという意見が強かった。

(3) 職業高校への一日体験学習について

一日体験学習実施上の諸問題及びその改善点について協議したが、その主な意見等は次のとおりである。

ア 職業高校から中学校への案内が各校ばらばらであったので、これを統一してほし

イ 対象を3年生とするよりも、2年生に実施した方が効果的ではないか。

ウ 中学校教職員の引率者をつけなくてもよくないか(中学校としては不安もあるので、やはり引率者をつけないわけにはいかないという意見もあった。)

エ 一日体験学習は、実習を主体にしてほしい(高校側では準備の都合上無理とみている)

(4) 高校入試における調査書の取り扱いについて

56年度から新教育課程完全実施に伴い、調査中の「各教科の学習の記録」のうち、外国語以外の選択教科の取り扱いをどのようにしたらよいかという点で協議した。

ア 外国語以外の選択教科の評定についてはこれを調査書に記入しない方がよいという意見もあったが、矢張り教育課程に位置付けて指導している以上、その評定結果を調査書に記入すべきであるという意見も強かった。そして、この問題は、中学校教育にプラスする方向で十分に検討する必要があるとの助言があった。

イ 県内中学校の外国語以外の選択教科の履習状況は、次のとおりであるが、できれば1教科選択でなく2教科以上にすべきであるとの助言があった。

- 1教科選択：51%
- 2教科選択：16%
- 3教科選択：14%
- 4教科選択：13%
- その他：6%

☒ 修学旅行部

部長 片山 悦男(瑞穂野中)
副部長 玉野 安一(小山二中)
〃 室田 広三(毛野中)

県修学旅行委員会に所属し、主として関西方面に集約列車を利用している学校と学校単位または小地域の学校が合同して実施している場合と種々あるようであるが、ここでは県修学旅行委員会についての本年度の傾向等述べてみたい。

新教育課程の実施に伴う修学旅行の目的、場所、生徒の健康、宿泊、見学の内容、時間、列車の状態、運賃料金等を考えあわせると幾多の問題もあり反省すべき時点に来ていると思われる。以下本年度の重要課題と思われる事項について述べてみると。

1. モデルコースの研修参加

東北新幹線の開通にあわせ、行動範囲も広くなると思われるのでその方面の開拓にあたる。また京都・奈良方面でも現時点にとらわれることなく新しい見学地についても積極的にあたる。

2. 関東修学旅行委員会研究発表会への参加

望ましい修学旅行のあり方について毎年研究発表会が行われている。本年度は2月5日大宮市で開催の予定。

3. 輸送計画の改善

新幹線以外のつなぎ列車に一般乗客とのかねあいより不便なことが多い。従ってこれがために終了まで長い期間を要し、学校による条件の差と大きくしている。

4. 旅行地域に関する調査研究

東北方面はもとより関西方面についても各校の将来にわたる希望調査を当分行い永久的な対策をたてる必要がある。

5. その他の件として

(1) 国鉄料金値上げに伴う交通費・宿泊費の割り増し、旅行補助費の増額交渉等

(2) 一校560名を超える場合の新幹線輸送による分割問題、ストに差しかかった場合のつなぎ列車、バス等の問題

これらの諸解決のためには関東・中部・近畿地区の修学旅行委員会、校長会をあげての結束が是非とも必要な時期になっている。

☒ 福利厚生部

部長 川島 平八郎(星が丘中)
副部長 大島 嘉一(本郷中)
〃 塩井 貞次(船生中)

1 福利厚生部の活動状況

生徒手帳の編集 各学校の使いやすさ、そして価格の安い生徒手帳の編集を心掛けて実施していますが、何分にも部数の少ない学校の場合は、学校の独自性を出すことがむずかしい。そこで県の共通版を利用させていただくこととなりますが、その共通版の中にも県独自のあり方を生かしていきたいと考えております。

中学生の新しい道の編集 道徳の副読本として御活用いただいている同書の編集につきましても、現場での使用の便宜を考えて、いろいろと工夫をしております。

中学生の安全の編集 最近とみに交通安全や校内生活の安全に対する関心が高まってきておりますが、その中で副読本として使用する同書の編集につきましても、いろいろと苦心しているところです。なるべく資料を豊富にして、自分たちの問題として考えるように編集しています。

これらの印税は、いずれも校長会の財政をうりおしているので、各学校においても大いに活用して欲しいと思います。

2 今後の展望

ところで昨年までの福利厚生部は、上記三種の編集だけで終っていたのですが、今後は本来の福利厚生の仕事を考えてやっていきたいと考えています。例えば、退職後の再就職の窓口を作るとか、共済組合の医療給付を退職後も70歳まで利用できるようにするとか、そのようなことがらです。

第33回関東甲信越地区

中学校長研究協議会開催される

去る6月11日・12日の両日にわたり、関東甲信越地区中学校長研究協議会が、千葉市で開催された。

第33回の研究協議会は、社会が急激に変動するなかで、1980年代の学校教育に対する国民の要請と期待が一段と高まりを見せている状況のもと、中学校においては、新教育課程実施第1年を迎え、新しい時代を創造する知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成をめざして、ゆとりのある充実した教育活動が展開されているわけであるが、校長は、学校経営の責任者として教育のあり方と、運営上の諸問題を究明し、中学校教育のいっそうの推進を図っていこうという趣旨のもとで開催された。

6月11日 開会式、大会会長柴崎氏、大会委員長林氏のあいさつにつづいて、来賓祝辞には、文部政務次官石橋氏が、「校長の重責を自覚して国民の期待に応えよ」と強調され、祝辞の最後には、全日中会長大高氏が、「関プロは、全日中の中核であり、役員総数の30%を占めていること予算削減、教科書問題、週休二日制、主任制等山積する中に、世間のきびしい批判を謙虚に受けとめ対応したいと結ばれた。

文部省初等中等教育局視学官斎藤弘氏の説明のあと、全体協議会では、江口・堀越両校長から提言があった。アトラクションには、稲毛浅間神社の述楽と、房州白浜音頭が披露された。

午後は、「豊かな人間性の育成をめざす新教育課題の推進」という全体協議題のもと、9分科会に分かれて、各会場2名の発表後、質級応答と、熱心な討議が行われた。各分科会の提案内容は次のとおりであった。

● 第1分科会

- ゆとりある充実した学校生活のあり方とその運営
- 教育内容の重点化とその方策 (千葉)
- 第2分科会
 - 教職員定数の実態とその改善 (山梨)
 - 新教育課程実施にともなう施設・設備等の充実改善 (千葉)
- 第3分科会
 - 能力、適性の生かし方 (千葉)
 - 進路指導の現状とその改善策 (埼玉)
- 第4分科会
 - 「豊かな人間性」のとらえ方と、その育成をめざす生徒指導について (東京)
 - 生徒指導体制のあり方 (千葉)
- 第5分科会
 - 特別活動の現状と望ましいあり方 (千葉)
 - 部活動の現状と望ましいあり方 (神奈川)
- 第6分科会
 - 職務運営組織の現状と改善等 (栃木)
 - 校長の専門性と指導性 (千葉)
- 第7分科会
 - 教師の専門性を高める現職教育の推進(新潟)
 - 教員養成制度、教育実習制度の現状と課題 (千葉)
- 第8分科会
 - 学校教育と家庭教育の連携 (群馬)
 - 学校教育と社会教育の連携 (千葉)
- 第9分科会
 - 特殊教育の現状と課題 (茨城)
 - 特殊学級の運営と学校体制 (千葉)

6月12日、全体協議において、各分科会の報告があり、続いて大会宣言決議案が上提され、満場の相手で可決された。記念講演は、千葉大学教育学部教授清水馨八郎氏の「経済社会の展望と首都圏の中の千葉県の使命」と題して、日本のあり方を強調され感銘深いものがあった。

なお、本県からは、59名の先生が出席され、介分科会では、本県の研究内容の水準の高さを認識させるに価する発言が多かった。

また、本県は、昭和58年度の開催県でもあり各参加者が、運営面にも深い関心をもって大会に臨んでいた。高島守親(横川中)

会員の声

編集部員の中から

新任校長の声

足利 愛宕台中 岡村 芳一
「一日平均15人の生徒が、毎日種々の問題で私に相談にくる。」とは、英国の某校長(Headmaster City of London)の話である。

(Asahi Weekly)「種々の役職を極力少なくして、教育者の立場に戻れ。」とは、本県の渡辺教育長のことばである。(教委だより)

たしかに校長といえども、(否、校長だからこそ)その豊かな教職経験を生かして、直接教師としての指導力を発揮すべきだと思う。教育の機能に、「人が、人を望ましく変容させる。」ことがあるとすれば校長こそ教職員や生徒ともっと行動を共にしその感化力を及ぼすべきではないだろうか。

それにはまず、校長たるものは学校にいななければならない。しかし、である。現状はどうだろうか。

わずか1学期間のことながら、校長の在校日は予想外に少なかったのに驚かされる。教頭時代は多忙の中にも、今よりずっと多く学校にいられてよかったという実感である。行政・管理面の会議職能団体をふくめて研修会と名のつくもの、そして社会教育関係の会合等、よくまあ次々あるのだと感心させられる。新米校長として、関係団体の役職を極力軽減していただいでいて、こうである。手帳は、出張等の予定がギッシリである。

もちろん、会合は精選して出席してはいる。理由をつけて欠席するもの、途中から退席するもの出張後も可能な限り帰校するなどの対応策をとっている。

管理面の仕事もさることながら、校長も「教師」の一人でありたいと思うのである。小規模校ゆえ、職員出張で穴があいた授業には、補教もやりたいと思う。生徒指導上の諸問題で、教育相談もやってみたい。この際、政府の第2臨調とやらのごとく一率出張何割カットとでもならないものだろうか。

視点・焦点

足尾中 斎藤 英 男

「子は誰のもの」と呼びかけたら、どんな返事があるだろうか。戦前・戦中のように、「国の宝」とか、「天子様の子」と言うような答にはならないだろう。「将来を担う社会の宝」とも言わないだろう。(胸の中では、現在の子どもたちは、21世紀を背負う大事な使命を持っている。この子らが、世界における日本の立場を(平和国家としての)証明してくれる国民に成長してくれるのである。八紘一宇的な考え方を持つとすれば、人間性豊かな日本人を育成する教育はあり得ない。生涯教育の一環としての学校教育であり、そのめざすものは、世界的視野にたった日本人。誰人にも差別なく偏見なく交際できる日本人として育ててもらいたい。との願望はあるのだが……)

「この子は、わたしの子だ」と100人中100人が答えてくれるだろう。手塩にかけた親子の愛情、血の絆、まったく有難いきわみである。

だが、その「大事な子」に問題が生じると、一変してしまふ。「うちの子に限ってそんなことはあり得ない。何かの間違いだ。そういうば、あの子と交際するようになってから……。」わが子可愛さのなせることと理解はするが、可愛いわが子に与えた影響はどうであったかを反省する、ゆとりもない。この親の気持と一体になって、子ども育成に立つのが学校ではなかるうか。学校の現場は忙しすぎる。研修だ、出張だ、部活だ、特活だ、授業だ。生徒の日記を読んで、赤ペンの指導を入れるのに、大切な空時間はなくなってしまふ。しかし一度手を抜いたら、生徒は教師を信頼しなくなる。教師の言い訳は、余程でないとな納得し兼ねる。教師の子どもが、飢えているのか、乾いているのか、かは知らないが、教師の努力しかない。「非行」「校内暴力」今の彼等に対しては、「正義感」を持たせるべく努力していくしかない。教師も生徒も保護者も、互いに相手の立場を理解しての努力の積み重ねである。

佐野市校長会の活動報告

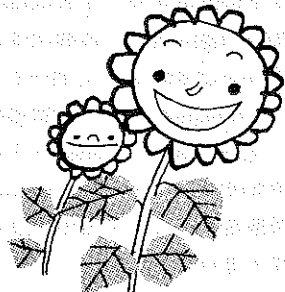
佐野南中 小曾根 剛 男

佐野市校長会の地域としての研修は、年間を見通して企画されたものに3種類ある。各研修会の名称と、主な内容は次のとおりである。

- 1 佐野市校長研修会
 - 各月1回(年間12回) 午後をあてる。
 - 前半は小・中合同で全体的な内容を取りあげ、後半は小・中学校種別で研修
- 2 安佐校長研修会
 - 4月～1月 各月1回(8月を除く) 全日研修 5回 半日研修 3回の計8回 9月には県内優良校視察を計画している。
 - 佐野市・田沼町・葛生町の各小・中学校長が参加する。
 - 研修の内容は、はじめに県教委、市町教委の要望事項、連絡事項を全体会で行い、その後小・中学校種別の分科会研修
- 3 安足校長研修会
 - 小・中学校長合同研修 1回(半日)
 - 中学校長研修 1回(半日)

各研修会とも、同一地域や隣接地域、同一教育事務所管下という、地域研修を通し、緊密な連携と、連帯意識を深めている。

本年度の主となる研修テーマは、生徒指導上の諸問題である。



栃木市中学校長会だより

寺尾中 野 尻 茂 雄

本市は七校の校長により組織され昨年度までの研究成果を基盤に更に深化するよう配慮 主たる活動は研修であるが次のように計画しすすめている。

- 1 研修テーマ 「同和教育の推進について」
 - 学校同和教育推進上の問題点と指導のポイント
- 2 研修内容
 - (1) 学校経営計画の中で同和教育を推進していくためのチェックポイント
 - ア 全体計画として
 - ・教育目標 ・教育課程(教育計画)
 - イ 部門別計画として
 - ・教科領域 ・学年・学級経営
 上記の内容を中心にして校長という立場から研究を行う。
 - (2) 教職員の意識の高揚をはかるためのチェックポイント
 - 何を、いつ、どこで、どのように指導するかなど
- 3 研修計画

月日	予想される研修内容
4/27	・研究計画立案
5/21	・前年度の研修のまとめについて ・市内先進校の研究の方向について ・小中合同四ブロックにわかれての研究
6/4	・上記の発表及びブロック別研究
6/26	・同和教育先進校研修視察 群馬町立中央中学校の同和教育推進状況について
8/21	・ブロックの研究発表と研究協議
10/21 ～23	・県外教育調査 徳島県 阿南市・鳴門市 (同和教育・教育機器・学校経営など)
11/24	・皆川城東小同和教育公開研究会参加

※研修内容に比べ回数は少ないが各校での実践過程の中で研究を深めるようにくふうしている。

下都賀中学校長会活動状況

藤岡中 大阿久 薫 雄

下都賀郡中学校長会は、碓井会長を中心にして総勢10名の会員。各校の主体制を尊重しつつ、情報交換を深めて教育活動の正常化と活発化に寄与するという基本方針を受け、下記のような行事計画表により本年度の活動を展開している。

昭和56年度行事計画表

回	曜	行 事	会 場	備考
1	4/4 土	・総会 ・教育事務所長講話	下庁舎	9:00～
2	5/8 金	・教育課程実施上の問題点 ・修学旅行 ・諸連絡報告	"	"
3	7/9 木	・生徒指導上の問題点(講話) ・諸連絡・報告	宇・少年鑑別所	10:00～
4	9/8 火	・部活指導上特に留意する点 ・諸連絡・報告	野木中	"
5	10/22 木	・進路指導上の諸問題 ・諸連絡・報告	壬生中	"
6	11/18 水 11/20 金	・県外合同研修		
7	12/10 木	・道徳教育の諸問題 ・諸連絡・報告	国分寺中	10:00～
8	1/12 火	・中学生の男女の交際 ・諸連絡・報告	下庁舎	"
9	2/25 木	・同和教育実施上の諸問題(講師招聘) ・諸連絡・報告	"	"
10	3/9 火	・研修のまとめ ・諸連絡・報告	野木中	"
11	3/29 月	・次年度の計画	"	"

講話以外の研修は、会場校で資料を提供したり、各自問題点を持ち寄ったりして研修の効果をあげるようにしている。

会員数も手頃でお互いホンネが出し合える雰囲気なので、得るところが多いと自画自賛している。

那須地区中学校長会の活動状況

東那須野中 長 山 満 男

那須地区の校長会は、小学校・中学校が一体となって、那須地区小中学校長会を組織しており、その中に中学校部会(中学校長会)があり、全体として或いは、部会別に活動しております。

昭和56年度は、大田原中学校船山三男校長を会長に選任し、次の運営方針・重点目標を掲げ活動しております。

- 運営方針(前文略)
 - 1 郷土の特色を生かし、人間性豊かな人格形成に努める。
 - 2 義務教育尊重の気風を高揚する。
 - 3 本会の充実発展を図り、物的条件の整備と改善を促進する。
 - 4 新教育課程の研究と実践につとめる。

- 重点目標
 - 1 研修活動の推進
 - 2 対策活動の推進
 - 3 生徒の福祉条件の整備

以上概略を記したが、研修活動としては、次のテーマを設定し、9月4・5日塩原において1泊研修会を目ざし目下研究中であり、その成果は研究集録として発行されます。

- テーマ「豊かな人間性を育てる中学校教育の実践」
 - ・研究の柱
 - 1 新教育課程に基づいた学校運営の実践研究
 - 2 現実に即した生徒指導

その他2回の研修会(11・2月)教育講演会(7月共催)の開催、対策活動、生徒の福祉条件の整備としての「義務教育振興に関する要望の提出や教育予算等について市町村学務担当課長との話し合い(11月)、年度末人事異動について教育長部会との懇談会(1月)その他市町村代表による県外視察(11月)が予定されており、那須地区PTA連協との共催による、校長、PTA会長研修会が7月2・3日1泊で那須温泉で開催された。

雑 感

国本中 澤村三郎
ゆとりの時間に、全校一斉緑化作業を実施した。芝生の除草、少しばかりの学校菜園の手入れ、樹木の移植等に生徒・職員一諸に汗を流した。

作業をしている中に以外なことに気がついた。それは、学力も高く、生徒会、クラブ活動等では雄弁で、いつもリーダー的存在で、本校としては自他共に、優秀生徒として見られていた生徒の作業の状態である。

作業用のスコップのにぎり方もできず、小さな穴も掘れず、除草は葉の先だけをむしりとるといふ、まことにおそまつ、ひよわで、情けない様子に、これが、本校の優秀生徒かと改めて、見なおす始末であった。

本校を代表する生徒がこれでよいのか、私どもは何を基準に望ましい生徒と呼んだらよいのか、考え直してみなければならぬような強いショックを感じた。

机上の知識や記憶力を中心とした学力のひずみが、ここにも見られるような気がしてならない。

人間としての、やさしさと、かしこさと、そして、たくましさのバランスが、今、教育の中で最も要望されているときに、この優秀生徒の対応に私共教師があやまつた指導観をもって接していなかったという反省にかられた。

手をおしての教育、体をおしての教育を、もう一度、校長自身が、先頭に立って実践してみようではないか。

追憶石島先生

昭和16年12月に太平洋戦争が勃発した「帝国陸海軍は今8日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」のラジオ放送は、いままの底にあるようだ。手もとの年表を繰ると、翌17年1月に学徒出動命令が下されている。当時私は新聞・ラジオの大本営発表で仲間と沸き立っていた。9月卒業～10月入学予定の身に夏休みは慌しいものとなった。大学では学徒出陣に贈るつもりか休みの前の学報に教授の推選図書に掲載した。購入の便を計ってか文庫本・新書本が多かった。記憶に残

る書名は、菜根譚・葉隠・アルトハイデルベルヒなど洋の東西を問わず、哲学・文学・政治・経済と雑多で、それに教授の短評も添えてあった。

石島先生は正法眼蔵随聞記を推奨されていた随聞記を愛読書とする青年教師を時折聞く、また第30回愛媛大会の記念講演で檜橋一光師が道元の正法を説かれていた。教授はみな一学説を唱え著書もあった。(今もそうであろうが、中には売るために本を書くとか)若い者は個人としての教えを受けずとも師の一挙一動・表情によってその人柄を感知する。石島先生はどことなく諦観めく茫洋とした風情で話され学生に慕われていた。難しい書を研究されているとの噂もあった。

私は軍隊生活65日目に負傷しそれがもって予備役免除になってしまった。戦時下で若い男がぶらぶらしているのは心苦しかったが、しばらく勤めを休み、体調を整えるために、近くの川べりで散歩を仕事としていた、時にはまちの中に足をのばした。目的は書店めぐりである。そのような折、新刊本の少なくなって閑散とした書店の棚に岩波文庫抱朴子を見つけその著者名に目を見張った。雑然とした私の書架の片隅にその「抱朴子」はある。背表紙は古びているが書名と8ポ活字で、石島快隆訳註とはっきり読める。後表紙には亀田書店着日17.10.31と捺印したラベルがはってあり宇都宮空襲を辛うじて逃れた焼け焦げも少々ある。神仙の書とは知ったが未だ読んではいない。恩師石島先生に済まないと思っているが。

編集後記

- ◇ 新教育課程実施第1年めを迎え、各学校においては、それぞれ創意と工夫に満ちた教育活動が展開されていること、思います。
- ◇ 会報も、従来のものに比して幾分工夫を凝らしたつもりですが、できれば？ご指導ご叱正をお願いする次第です。
- ◇ みよりの秋を迎え、各先生方のいっそうのご活躍をご期待申し上げます。(M.T)